

高速道路無料化の恩恵

高速道路無料化実験が6月末から始まった。マスコミでは観光への効果が多く取り上げられているが、本格的に無料化された場合に最も可能性を持つのは「通勤」と「居住」ではなからうか。高速道路の整備効果は、「遠距離を短時間で結ぶこと」であり、地域で最も大量の交通は通勤交通である。これまでも少数の高速道路利用通勤者が見られるが、その多くは転勤を理由とするもので、高速道路通勤を前提として居住地を探す人は少なかった。高速道路料金が無料または極めて安いならば、職場から遠くても、自然環境や伝統文化が豊かな土地に住むことは十分検討に値する。居住者は快適な生活が送れ、都市から離れた農山漁村の活性化にも役立つはずである。

Exurb 〇し知〇しつまやが?

Exurb は 'Extra Suburbs' つまり「郊外の果て」と言う意味の1955年に作られたアメリカ造語であるが、最近のアメリカ

TALK NOW -トークナウ-

超郊外居住のすすめ

(財)えひめ地域政策研究センター
特別研究員 柏谷 増男



力では、研究論文のみならず一般雑誌や新聞でも取り上げられるようになってきている。2000年のアメリカ国勢調査によると1,080万人、大都市圏人口の6%がExurb居住者といわれている。都市圏の外縁、農村地域との境界付近に新たに開発された住宅地で、一戸当りの敷地も広く、農村的雰囲気になった地域に急速な開発が進んでいる。居住者の大部分は白人の所得者で、相対的に子供のいる世帯が多い。彼らの多くは、「子供は広々とした自然環境の中で育てるべき」という伝統的考え方のもとで、自分が長距離通勤を負担することによって、少しでも安く広い土地を確保したい人々である。そのほかには、自然や農村的雰囲気を愛好する人々、特にIT技術や仕事のスタイルの変化によって毎日通勤しなくてもよい人、退職後の生活を楽しみたい、あるいはそれを前倒しして住み着く人々などがある。

新たな農山村居住

UターンやIターン、さまざまな移住者

わが国のExurbの可能性

を呼び込むことによって、地域の活性化をはかろうとする取り組みがなされている。農・林・漁業を目的にした移住希望者もいるが、豊かな自然の中でゆつくり暮らしたい方もおられる。農・林・漁業はなまやさしい職業ではない。近くの都市で働きながら、ゆつたりとした時間の中で、地域のぬくもりに触れながら生活するのも悪くはないはずだ。一方、受け入れ地域では、新しい住民を迎えることによって、地域活性化をはかりたいと考えていると思われる。長距離通勤が可能になれば、近くの都市の住民が新たに農山村で居住を始める可能性がある。その中には以前にその村や町を離れていった人々も混じっている。地域外からの移住希望者達も慣れない農・林・漁業ではなく、これまで携わってきた職種を続けながら田舎暮らしを楽しむことが出来るかもしれない。高速道路無料化を上手に使いこなせば、「移住による地域活性化」の幅や奥行きは大きく改善されると期待される。

アメリカでExurbが一般的になりつつあるが、わが国の場合、東京や大阪などの大都市圏では中心市への人口回帰傾向が見られ、多くの地方都市圏では周辺部人口は減少しているなど、依然として都市化が基調である。アメリカのように超郊外や周辺農村地域での人口増は望めない。いくつかの考えられる理由を並べてみよう。まず、敷地の広さや自然環境へのこだわりを持つ人はアメリカ人のようには多くはない。日本人は近所にコンビニがあるといった便利さをより強く好んでいるのではなかろうか。また、アメリカ人には伝統的に農村的アメニティ選好が見られるが、日本人にとつて、農村社会は「しがらみ」が多い、なんとなく「遅れている」といった否定的イメージを持つてきたように思われる。これまで高速道路料金が高く、高速道路を通勤に使うという発想がなかったことも挙げられよう。可能性を検討しよう。まず第1の好みの問題であるが、「利便さ」をより重視する人

が相対的には多いかもしれないが、移住希望者のように自然環境や人情を重視したい人もいる。相対的に少ないといっても、地域活性化をねらう市町村には十分な数かもしれない。お祭りを含めた伝統行事の魅力もある。第2の社会的特長については、地域は大きく変わりつつある。移住者受け入れに熱心な地域では、自然環境と調和し、伝統文化の良さを残しながら、外来者を暖かく受け入れる努力を重ねている。第3の問題は、高速道路無料化によって大きく改善されよう。

愛媛県でも南予の高速道路無料化によって、内子町、大洲市、西予市などが松山市にとつての超郊外になる可能性がある。また三坂トンネルの開通により久万高原町は四季の魅力にあふれた居住地になると期待される。

住宅地としての発展とまではゆかなくとも、地域活性化には役立つであろう。各自治体での取り組みに期待するとともに、多くの人々に豊かな自然や伝統文化に触れる暮らしを検討してみてもいい。